

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容 :1960年代前半における近代化論の展開を中心にして(その2)

李 東 俊

序章：問題関心

第1章：近代化論と地域研究、そしてライシャワー

第2章：ライシャワーの「日本近代化」論と日本の言説空間

1. 米国版・近代化論の日本上陸：「箱根会議」

2. 「ライシャワー攻勢」

3. 近代化論の波及と言説空間の変容：「先進国」へ

----- (以上、前号)

4. 日本の対韓国認識の変容

第3章：ライシャワー式の近代化論と韓国の言説空間

1. ライシャワーと韓国、韓国像

----- (以下、次号)

2. 米国版・近代化論の韓国上陸：文明から「開発」へ

3. 「祖国近代化」論の展開

4. 韓国の対日認識の変容

第4章：ライシャワーと日韓「親米・反共・開発主義ネットワーク」の形成：国交正常化へ

第5章：近代化論と日韓「1965体制」の展開

結論

第2章：ライシャワーの「日本近代化」論と日本の言説空間

4. 日本の対韓国認識の変容

戦後日本人の韓国認識は総じて、戦前のそれをほぼそのまま受け継ぎながらも、しばらくの停滞、空白状態を余儀なくされたと言える。それは、日本帝国主義の解体と朝鮮半島の分離独立、そして国内及び国際冷戦の展開という地政学上の大変動に伴う、朝鮮半島との物理的な断絶に起因するものでもあるが、より本質的には、日本人の韓国及び朝鮮半島に対する認識、特にその歴史観が依然として戦前の「宗主国：植民地」という枠組みにとどまっていたからであろう。戦後日本における朝鮮近代史研究で中心的役割を担ってきた旗田巍は、日本人の韓国認識が日本の敗戦によって質的に転換したのではなく、戦前の植民地支配意識が停滞状態に置かれていたと診断しつつ¹、戦後間もなくの日本における朝鮮史研究の状況について次のように振り返った。

朝鮮という言葉が朝鮮人にとって不愉快極まる感じを^{あた}興えた時には、朝鮮史を研究する意欲も起きなかったと思う。同時に、このことは若い日本人に対しても朝鮮史研究への熱意を失わせた。しかも……日本人の朝鮮史研究の主力は古代史に注がれ、近代史には乏しかった上に、その古代史研究は文献批判・クロノロジー・地名考証を特色とするものであった。……人間の無い歴史学がつくられたのである。……そして日本の敗退によって朝鮮に対する支配が消滅し、朝鮮研究者は国家の力を得られなくなった。そのためにこれまでの朝鮮研究は一気に沈滞してしまった²。

¹ 旗田巍『日本人の朝鮮観』（東京：勁草書房、1969年）、296-297頁。

² 旗田巍『朝鮮史』（東京：岩波書店、1951年）、4頁。

このように旗田は、日本人の韓国への関心が、植民地支配の終焉と同時に一気に薄れたと評価しつつ、他方で古代史研究のような「人間の無い歴史学」が作られたと慨嘆した。しかし、旗田のいう「人間の無い歴史学」すなわち「朝鮮人不在の朝鮮研究」³は戦後に新たに生まれたものではなく、戦前から頻りに追求されてきた日本の韓国観そのものであった。対象化(objectification)された韓国を位階的に位置付けて認識する近代日本人の韓国観に関する研究は幅広く行われてきた。

「日鮮同種論」と差別・優越意識

その中で韓国観の原型を考察し続けた旗田は、近代日本の史学者たちの多くが共有した「日鮮同祖論」が長らく日本人の思考を支配したと述べている。「日鮮同種論」や「日鮮同域論」とも呼ばれた日鮮同祖論は、日本が帝国主義化していく過程で、特に韓国支配期においては、日本の韓国侵略の有力な観念的支柱になり、後には満州や蒙古の諸民族をも包摂した「満鮮史観」⁴へと、その観念の範疇を広げていった、と旗田は指摘する⁵。

しかしながら、日本と韓国との近親性や一体性を強調するこの日鮮同祖論は、両民族・両国の連帯とは全く相反する言説でもあった。そこには韓国を独自の民族あるいは国家として尊重する意識が全くないばかりか、相手の存在自体を否定していたからである⁶。江戸時代の国学者たちを中心に、日本の

³ 旗田巍編『シンポジウム 日本と朝鮮』（東京：勁草書房、1969年）、183頁。

⁴ 「満鮮史観」とは、日本が満州に進出した時に発生し得る歴史的問題を予め取り除こうとする目的で、満州史を中国史から分離したうえで、満州史を朝鮮史と同じ体系の中に結合させた歴史観である。満鮮史観の誕生は1908年に南満州鉄道東京支社内に設置された満洲・朝鮮を研究する「満鮮地理歴史調査室」に遡るが、のちにその研究は東京帝国大学に移管され、『満鮮地理歴史研究報告』16冊分などの研究成果が出された。李龍範「韓國史의 他律性論批判」〔韓国史の他律性論批判〕『亜細亜』（1969年3月）を参照。

⁵ 旗田巍、前掲、『日本人の朝鮮観』、36-41頁。

⁶ 旗田巍、前掲、『日本人の朝鮮観』、39頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

建国神話すなわち神皇正統記などの記録に見られる、太古の日本の神と天皇が韓国を支配したという神話に基づいて、日本の優越的地位を主張したのが、日本人の韓国観の原型をなしたと、旗田は見た⁷。

こうした歴史解釈から当然に、韓国についての一つの「偏った」歴史像が作り出された。それは、韓国は神代の昔から日本の支配下にあったという歴史像であるが、『国史眼』⁸に代表される国史編纂を通じて確立されて以来、小・中学校などの日本史教科書の手本となり、ステレオタイプ⁹のように日本人の心に植え付けられていった。

人種差別観や優生思想をも想起させるほど、韓国に対する優越意識を誇示しようとしたことを特徴とする日鮮同祖論の言説は、戦後も改まることなく日本人の韓国認識の底流をなしていたと思われる。日鮮同種論に基づいて形成された韓国観は戦後に至っても数えきれないほど再生産され、日韓会談に関わった日本当局者たちも例外ではなかった。

例えば、第4次日韓会談の日本側首席代表を務めた沢田廉三（当時、外務省顧問）は1958年6月11日に開かれた「朝鮮懇談会」主催の集会で、「日清・日露の両戦争はいずれも日本を脅かす勢力が朝鮮半島に進出してきたので、これを鴨緑江の外に押し返した戦いであった。われわれは三度立って三八度線鴨緑江の外におし返さねば先祖にたいし申訳ない。これは日本外交

⁷ 旗田巍編、前掲、『シンポジウム 日本と朝鮮』、5頁。

⁸ 重野安繹・久米邦武・星野恒編で1890年（明治23年）に帝国大学より刊行された『国史眼』は、神代から1889年の大日本帝国憲法発布にいたる日本通史に相当する（総7冊）。この書はとくに国学の伝統をひく「日鮮同祖論」の立場で日本と朝鮮との位階的な関係を強調していた。旗田巍編、前掲、『シンポジウム 日本と朝鮮』、5頁。

⁹ 固定観念と同義であるステレオタイプは、米国ジャーナリストのリプマンが著書 *public opinion*（1922年）にて、「我々の頭の中のイメージ（pictures in our head）」という社会学的概念として使用したのが始発となった。リプマンによれば、我々は特定の対象を認識する際に、客観的で価値中立的な経験や知識に基づいて思考を行うのではなく、対象について持っていた個人の主観的な表象とフィルタを通して認識するという。Walter Lippmann, *Public Opinion* (Charleston, South Carolina: BiblioBazar, 2007), p.73.

の任務である」¹⁰と述べ、大きな問題となったが、ここで言う「われわれ」の「先祖」とは「日鮮同祖」を前提にするものだった。さらに、1963年12月、自民党副総裁として朴正熙大統領の就任式に出席するためにソウルを訪問した大野伴睦は、「朴大統領とは互いに親子の間柄だと自任するくらいの親しい間柄だ。息子の祝いに臨むようになったのは何よりも嬉しい」¹¹と述べ、日韓関係を「親子」に例えた。他方、橋本登美三郎・官房長官は1965年3月17日付の『中日新聞』との会見で、「韓国は日本を兄貴分と思っている。わが国が長男で、韓国が末弟のようなものさ。傾きかけている家（韓国、筆者）はしっかり助けてやらねばならない」¹²と言った。このように、日韓関係はしばしば、親子や兄弟のような近親関係と称され、その枠組みにあって韓国は例外なく日本より劣勢・下位の立場に位置付けられた。

そして、当然の帰結でもあるが、こうした優越意識は、日本帝国主義と植民地支配の公然たる正当化につながった。岸信介の腹心でもあった椎名悦三郎は、外相として日韓会談の前面に立っていた最中、自著で以下のように述べた。

日本が明治以来、このように強大な西欧帝国主義の牙から、アジアを守り、日本の独立を維持するため、台湾を経営し、朝鮮を合邦し、満州に五族共（協）和の夢を託したことが、日本帝国主義だというのは、それは栄光の帝国主義であり（後略）。¹³

¹⁰ 日韓関係を記録する会『資料・日韓関係Ⅰ：政治・経済・拷問の実態』（東京：現代史出版会、1976年）、35頁；旗田巍・寺尾五郎等『アジア・アフリカ講座：日本と朝鮮』第3巻（東京：勁草書房、1965年）、202頁。

¹¹ 『朝日新聞』1963年12月20日。

¹² 日韓関係を記録する会、前掲、『資料・日韓関係Ⅰ』、41頁。

¹³ 椎名悦三郎『童話と政治』（東京：東洋政治経済研究所、1963年）、58-59頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

日韓の親近感に基づく日鮮同祖論の言説は、決して当事者間の自由かつ平等な連帯やパートナーシップに向かうものではなく、むしろ極めて攻撃的な形で噴出することが多かった。近代精神分析学の創始者フロイト（Sigmund Freud）のいう「隣接した二つの共同体における攻撃衝動」¹⁴、すなわち、互いに類似した面が多い人間集団にあっては、かえって些細な違いや違和感を巡って激しく罵りあい、軽蔑しあうという現象が、日本人の韓国認識にも容易に見て取れたのである。フロイトは、共通点が多いにもかかわらず、蔑視しあう実例として、スペイン人とポルトガル人、北ドイツ人と南ドイツ人、イングランド人とスコットランド人との関係に加えて、西欧社会におけるユダヤ人憎悪などを取り上げていたが¹⁵、日本人にとっての韓国も、最も近い隣りの国であるからこそ、歪んで見え続け¹⁶、しばしば攻撃欲の「はけ口」となった。

社会心理学者の我妻洋などが1960年代前半に日本人の人種観を調べるうえで、「最も好きな国民、民族」を13のうちから選ばせる世論調査を実施した結果、朝鮮民族は12位であった。朝鮮民族よりも低いのは黒人であった¹⁷。さらに「親友になる」「隣に住む」など10項目をあげて「受容度」を質問した場合、朝鮮民族に対する拒絶反応が、すべての項目にわたって他国民、民族を上回った。この調査資料を重視したジャーナリストの山本剛史は、『つまり、日本人は朝鮮人が嫌いなのである。この蔑視感は、知性とは

¹⁴ ジークムント・フロイト著／中山元訳「文化への不満」『幻想の未来／文化への不満』（東京：光文社、2007年）、228-229頁。フロイトによれば、この現象は、自己共同体の結束を強めようとする本能の下に、外部に暮らしている人々に対する抑圧を強める、という社会の一般的なメカニズムの現れである。湯田豊『フロイト「文明とそれの不満」を読む』（東京：北樹出版、1998年）。

¹⁵ フロイト、前掲、「人間モーセと一神教（抄）」『幻想の未来／文化への不満』、370-371。

¹⁶ 林建彦『近い国ほど、ゆがんで見える：日韓ギャップの源流』（東京：サイマル出版会、1982年）、5頁。

¹⁷ 我妻洋・米山俊直『偏見の構造：日本人の人種観』NHKブックス55（東京：日本放送出版協会、1964年）、121-126頁。

関係なく心の深層にこびりついているものようだ』¹⁸と述べた。このように、日鮮同祖論は、戦後も延々と日本人の韓国観に影を落としていた。

文明史観に基づく「未開な」韓国像

しかし、日鮮同祖論以上に、近代日本人の韓国観の形成に強い影響を及ぼしたのは、いわゆる脱亜論者たちの韓国を巡る言説であったと思われる。福澤諭吉が近代日本人の思想形成に大きな役割を果たしたのは周知の通りだが、アジア観・韓国観に関しても、福澤の思想は直接、間接に強く作用した。福澤は、文明開化＝資本主義化＝西欧化というコースを設定し、西欧文明への到達こそ唯一最上の目標と見なし¹⁹、それを基準にアジアの遅れた面を批判した。それが直截に示されたのが、福澤が1885年3月16日付で『時事新報』の論説として書いたとされる「脱亜論」である²⁰。

全体の字数も2千字程度であり、アジアにおいて日本がアジア的価値観から脱し、文明化に向かって努力する唯一の国であることを主張した第1段落と、未だに文明化の道を行んでいないと見なされる清国と朝鮮に歩調を合わせることなく、日本は文明化を進めていくべきと主張した第2段落から成る。その一節に、次のような言葉がある。

我日本の国土は亜細亜の東辺に在りと雖ども、その国民の精神は既に亜細亜の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは近隣に国あり、一を支那と云い、一を朝鮮と云う。この二国の人民も古来、亜細亜流の政教風俗に養わるゝこと、我日本国民に異ならずと雖ど

¹⁸ 山本剛史『日韓関係：協力と対立の交渉史（時事問題解説29）』（東京：教育社、1978年）、21頁。

¹⁹ 旗田巍、前掲、『日本人の朝鮮観』、31頁。

²⁰ この論説は無署名で『時事新報』に掲載されたものの、1933年に石河幹明編『続福澤全集』第2巻（岩波書店）に収録されて以来、福澤諭吉が執筆したと考えられるようになったと言われる。

も、その人種の由来を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも遺伝教育の旨に同じからざる所のものあるか……この二国の者共は一身に就き又一国に関して改進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非ざれども、耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、その古風旧慣に恋々するの情は百千年の古に異ならず……儒教主義と云い、……一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、その実際に於ては真理原則の知見なきのみか、道德さえ……自省の念なき者の如し。²¹

この引用部分の主旨は、日本が文明化の努力を継続しているにもかかわらず、「古風旧慣に恋々する」旧態依然とした朝鮮・清国（中国）と、その「儒教主義」への批判にある。その上で福澤は、日本がこれらの隣国と同一視されてはならないと述べつつ、もはや共にアジアを興す猶予などなく、むしろ「脱亜」し、西洋文明国と進退を共にすべきだと訴えていた。

この「脱亜論」として表現された福澤の韓国を含むアジア認識を巡っては、これまで枚挙にいとまがないほど多くの解釈がなされてきたが、福澤が朝鮮との同文・同種を強調する日鮮同祖論とは距離を置き、むしろそれをあえて否定したことは注目に値する。要するに福澤は、日鮮同祖論とは異なる基準、すなわち西欧主導の文明史観に則って、「野蛮文明の別」として人種と民族を類型化した上で²²、朝鮮を「未開」の状態であると規定したのである。

その当然の帰結として福澤は、「未開」や「野蛮」の朝鮮とは手を切り、

²¹ 『時事新報』1885年（明治18年）3月16日（<http://blechmusik.xii.jp/resources/hirayama/editorials/1885/18850316.pdf>）；『福澤論吉著作集』第8巻（東京：慶應義塾大学出版会、2002年）、262-263頁。

²² 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』（東京：岩波書店、2004年）、104頁。

西欧文明に向かって進むのが日本の生きる道だと考えただけでなく、さらに一歩進んで、脱亜の立場から日本の朝鮮への積極的干渉を主張するに至る。そして、福澤により再設定された「未開な」韓国像は、学術的、評論的テキストにも浸透するとともに、次のテキストが生成される過程でも参照されることで具体化し、反復・再生産されていく²³。

「著しく後進的で、前近代的な」韓国像

日本の経済学を開拓したとも評される福田徳三による韓国観はその好例となろう。福田は、1902年夏に朝鮮半島を旅行し、現地の実情を見聞し、同時に資料を集めた。その見聞・資料に基づいて書いたのが「韓国ノ経済組織ト経済単位」²⁴という論文である。この論文で福田は、西欧中心の文明史観に基づいて、朝鮮経済のレベルが日本の近代的発展とは異なり、著しく落伍していると断定したのである。

福田の論文で注目すべき点は、朝鮮経済の著しい後進性の根源として、封建制度の欠如を挙げたことである。福田は、国民経済＝資本主義が順調に発達するための前提条件として、封建制度の存在を極めて重視したが、朝鮮の現状は日本でいえば、封建制度が成立していなかった藤原時代末期の段階に相当すると述べた²⁵。日本は西洋と同様に封建制度があったから、近代社会への発展が可能であったが、朝鮮は封建制度成立以前の極めて幼稚な段階にあるため、近代社会への自主的発展は望めない、という²⁶。

²³ 姜尚中、前掲、『オリエンタリズムの彼方へ』、105頁。

²⁴ 福田徳三「韓国ノ経済組織ト経済単位」『内外論叢』2巻1号（1903年11月）・3巻6号（1904年12月）・4巻1号（1905年2月）。のちにカタカナをひらがなに変え、『経済学研究』（1915年）に所収。

²⁵ 宮嶋博史「日本人の朝鮮史研究と『停滞論』」『季刊三千里』第21号（1980年2月）、50頁。

²⁶ さて、西欧のfeudalismを初めて「封建（制）」と訳した福澤諭吉は『福翁自伝』において、「門閥（封建）制度は親の敵でござる」と述べ封建制を罵った。しかしこの点について、日本中世政治史専門の今谷明は、福澤が門閥制度を活かして3度も欧米に旅行したことを取り上げ、福澤の封建制攻撃は本音とは受け取れず、いわゆる為にする議論の類としか思えない、と解釈した。今谷明『封建制の文明史観：近代化をもたらした歴史の遺産』（東京：PHP研究所、2008年）、5、86-88頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

こうした福田の封建制に対する評価は²⁷、封建制の経験如何をもって近代化への成否を測ろうとしたライシャワーの「日本近代化」論の先駆けでもあった。第1章第3節で述べた通り、ライシャワーは、日本が非西洋地域で唯一、近代化に成功した要因として、西欧先進国が経験した封建制度を共有したからである、との主張を繰り返し展開した²⁸。ライシャワーが「伝統的な日本」における最大の特徴を、12世紀の藤原時代から19世紀まで続いた封建制度に求めたことから²⁹、福田の歴史認識との類似性を見て取れる。ライシャワーの近代化論なるものも、大まかに言えば、西欧中心の文明史観に則った福澤の脱亜論や、それを受け継いだ福田の経済史観を継承したと言える。

さらに、旗田巍によれば、福田の論文はわずかな資料と短期間の旅行の見聞に基づく大雑把なもので、隙間だらけであったにもかかわらず、その後の日本人の韓国像の形成に及ぼした影響は甚大だった³⁰。福田の論文は以後、日本における植民地主義史学の朝鮮停滞論では、必ず引照される古典となったからである³¹。日本人の手による朝鮮経済史の研究の多くが、福田の論文を出発点とし、同様の問題意識すなわち封建制度の欠如や、藤原氏時代に相当する著しい後進性という文脈から植民地韓国を論じていた。西洋近代文

²⁷ 福田徳三は、ミュンヘン大学に提出した博士論文 *Die gesellschaftliche und wirtschaftseinheit in Japan* (Stuttgart: Cotta, 1900) [坂西由蔵訳『日本経済史論』寶文館、1907年]にて、日本の中世を封建時代と指定した。この本は、西欧の学者に多く読まれ、絶大な影響を及ぼしたという。今谷明、前掲、『封建制の文明史観』、96頁。

²⁸ E. O. ライシャワー「日本歴史の特異性」『日本近代の新しい見方』（東京：講談社、1965年）、31頁；エドウィン・O. ライシャワー著、福島正光訳『ザ・ジャパニーズ・トゥデイ』（東京：文藝春秋、1990年）、71-95頁。

²⁹ エドウィン・O. ライシャワー著、国弘正雄訳『ライシャワーの日本史』（東京：講談社、2001年）、64-133頁。

³⁰ 旗田巍、前掲、『日本人の朝鮮観』、35頁。

³¹ 李萬烈「近現代韓日関係研究史—日本人の韓国史研究を中心に—」『日韓歴史共同研究報告書（第1期）』（2005年6月）、238頁 (https://www.jkcf.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/2019/11/12-0k_j.pdf)。

明、特に資本主義モデルを最高の目標点と見なし、この目標点との距離を測定して優劣を分別する方法によると、日本の文明的な先進性と朝鮮の後進性・停滞性が目立つのは当然であった³²。この視点はまた、アジアの中で唯一、西欧の仲間入りを果たした日本が、停滞した韓国とは違うのだという一種の差別主義的なナショナリズムの表れでもあった。

この点について、政治学者の姜尚中は、日本の正統的發展を確認するために、そこから「逸脱」した「異端」を必要としたのであり、日本＝西欧から視て「特殊中の特殊」たる韓国こそ、その格好の比較対象として選びだされたと皮肉った。その上で姜は、だからこそ、それはまさに「自分たちの優越性を映し出すための自惚れ鏡」であって、そこに見られるのは、アジア研究から日本を除外し、「自分がアジアの一員であることを忘れよう」とする自家撞着的な努力に他ならない、と批判した³³。

そして、福田の論文にも露骨に示されたように、文明国たる日本は自主的發展が不可能な朝鮮を啓蒙・指導・開発すべきであるという帝国主義的使命感が自然に形成された。そして、開発に当たっては、朝鮮古来の伝統・風習、例えば村落自治などを顧みる必要はなく、これを美風という者がいるが、そういう美風は破壊すべきであり、土地と人間とを古い伝統的社会から解放し、土地の私有化・資本化、労働者と企業化との階級分化を促進すべきである、と福田は主張した。その上で、日本人が「韓国と韓人に対して」な

³² こうした所以などから、福田は「日本型オリエンタリズムの経済学的な元祖」とでもいうべき存在とされた。鶴園裕「福田徳三：日本型オリエンタリズムの朝鮮観」館野哲編『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人：西郷隆盛、福澤諭吉から現代まで』（東京：明石書店、2002年）、71頁。

³³ 姜尚中「福田徳三の『朝鮮停滞史観』：停滞論の原像」『季刊三千里』第49号（1987年2月）、84頁。他方で、社会思想史専門の武藤秀太郎は、福田の経済史研究の主眼が国家ではなく「社会」問題の本質を見極めることに置かれていたとして、姜氏の福田批判を「やや国家的枠組みに囚われた見解」と反駁した。武藤秀太郎「福田徳三における社会政策論とアジア：異端の大正デモクラシー思想」『日本思想史学』第36巻（2004年）、178-179頁；武藤秀太郎『近代日本の社会科学と東アジア』（東京：藤原書店、2009年）、110頁。

すべき使命について、「腐敗衰亡の極を致せる『民族的特性』を根底より消滅せしめ、以て己れに同化せしむ可き自然的運命を義務とを有せる『有力優勢なる文化』の使命の重きに任ず可きものにあらざるか」と締めくくった³⁴。福田の目に映る朝鮮は、「有力優勢なる文化」を持つ日本こそが支配して同化させねばならない対象物に過ぎなかったと言える³⁵。

植民地・帝国主義史観の連続性

このような文明史観に則った韓国観は、日本による朝鮮半島の植民地支配を正当化する植民地主義史観として日本社会に深く根を下ろすことになる³⁶。1945年8月に日本帝国主義は解体に至ったが、文明史観や植民地主義史観に囚われた日本人の韓国観は根本的には動かなかった。1945年12月、日本外務省は植民地および賠償問題について、連合国側の配慮を期待して、「割譲地に関する経済的、財政的事項の処理に関する陳述」という文書を作成した。文書は以下のように述べる。

先ず指摘したい点は、日本のこれら地域に対する施政は決して所謂植民地に対する搾取政治と認められるべきではないことである。逆にこれら地域は日本領有になった当時はいずれからもアンダー・デヴェロップ

³⁴ 福田徳三『経済学研究』前巻（東京：同文館、1915年）、147頁。

³⁵ さて、福田の韓国観は、大正中期に入り、黎明会活動、とくに吉野作造との出会いなどを契機として朝鮮の独立運動を原則支持する方向に転回していったと言われる。黎明会は1918年末、「頑迷思想の撲滅」を綱領として民本主義に立つ学者・思想家を結集して結成された言論団体である。田中秀臣「福田健三の朝鮮観」『上武大学商学部紀要』第12巻第2号（2001年3月）、17-18頁。

³⁶ しかし一方で、韓国の美意識を通して深い理解を表した柳宗悦をはじめ、柳の友人として韓国の文化芸術に関して研究した浅川巧、韓国を視察して植民統治の不合理性を認知した吉野作造など、韓国観を改めようとした試みもあった。しかし、このような試みは、文明史観に基づいて韓国を未開の状態とみる言説が既に一般化していたことを考えれば、極めて微弱な非主流の言説にとどまったと言える。朴素瑩「近代日本における韓国表象：主に教科書分析を通して」、九州大学博士（比較社会文化）論文（2015年）、47-51頁；呉林俊『日本人の朝鮮像』（東京：合同出版、1973年）、112-133頁。

な地域であって、各地域の経済的、社会的、文化志向と近代化はもっぱら日本側の貢献によるものであることは、すでに公平な世界の識者——原住民をも含めて——の認識するところである。³⁷

韓国に対する植民地支配は「アンダー・デヴェロップな地域」に対する「文明国」たる日本の恩恵であったという言説は、戦後に至っても多くの日本人に共有された。当時の首相だった吉田茂も、「日本の韓国統治が朝鮮国民に苦痛だけを与えたというのは事実と反すること甚だしい。むしろ、日本が韓国の経済発展と民生向上に致した寄与は、公正にこれを評価すべきで」³⁸ であると述べたのである。従って、1953年10月15日に開かれた第3次日韓会談の財産請求権委員会で、日本側の久保田貫一郎首席代表（当時、外務省参与）が対日請求権を求める韓国側に対して行った発言は、戦後日本人の多くが戦前から持っていた韓国観や植民地主義史観を外交の場で多少、声を荒げて表明したことに過ぎなかったと言える。

（前略）日本側としては、韓国においてハゲ山を緑にしたこと、鉄道を敷いたこと、港湾を建設したこと、米田を造成したこと、大蔵省の金を多い年は2,000万円、少ない年でも1,000万円も持出して韓国経済を培養したことを反対提案として提出し、韓国側の要求と相殺したことであろう。（中略）私の外交史の研究の結果からみると、当時日本が（朝鮮に）行かなかったとすれば、支那かロシアが入って来たであらう。³⁹

³⁷ 外務省・外交史料館、外交記録マイクロフィルム第七回公開（B・4.0.0.1）、『対日平和条約関係・準備研究関係』第5巻、B・0008-0675-5、104-105頁。

³⁸ 吉田茂『世界と日本』（東京：番町書房、1963年）、149頁。

³⁹ 日韓国交正常化交渉史編纂委員会「日韓国交正常化交渉の記録 第I編 総説 第3章 第2.3次日韓会談」（1971年）、文書番号：1915（日本外務省公開資料）、150-160頁（<http://www.f8.wx301.smilestart.ne.jp/nikkankaidanbunso/pdf/1915.pdf>）。

鉄道や港湾、米田を造成したことなどを取り上げ、日本の植民地支配が韓国の近代化に寄与したという「久保田発言」は、脱植民地主義（あるいは脱帝国主義）の視座から見れば、不条理極まりない詭弁に過ぎないが、近代文明国たる日本による野蛮の韓国支配を正当化する歴史観にたてば、理屈の通るもので、ある意味では、常識に属するものであった。こうした文明史観や植民地主義史観に基づく韓国観は、戦後日本の学界でも盛んに求められ続け、今もその影響力を発揮し続けている植民地近代化論に繋がっている。この言説は、日本支配下での朝鮮半島の資本主義的な発展を論じようとする点に特徴があるが、だからこそ日本の植民地支配を正当化する詭弁であるとの非難を受けてきた⁴⁰。

周知の通り、上記の「久保田発言」をきっかけに日韓会談は4年半の長きにわたって中断された。にもかかわらず、当時の日本外相であった岡崎勝男が記者会見で、「当たり前のことを当たり前にとただけのものだ」と断言したように、日本政府は、韓国側の「久保田妄言」云々の非難を一蹴し、同発言の趣旨を擁護し続けた。日本の国会や新聞でも支持する意見が多く、「久保田発言は平均的な日本人の朝鮮認識の発露」とも言えた⁴¹。要するに、戦後日本では、依然として西欧中心の文明史観や植民地主義史観とそこから導かれる位階的な韓国観が広く共有されていた。

米国のアジア戦略を介した日本人の韓国観

しかし一方で、占領下の日本をめぐる東アジア冷戦秩序が、1950年6月

⁴⁰ 趙景達『近代朝鮮と日本』（東京：岩波書店、2012年）、ii頁。植民地近代化論を批判的に捉え直した研究としては、도리우미 유타카 [鳥海豊]『일본학자가 본 식민지 근대화론: 일제강점기 일본인 토목청부업자의 부당이익을 중심으로』〔『日本学者がみた植民地近代化論：日帝強占期における日本人土木請負業者の不当利益を中心にして』〕（ソウル：知識産業社、2019年）がある。

⁴¹ 李鍾元など『戦後日韓関係史』（東京：有斐閣、2017年）、55頁。

～1953年7月の朝鮮戦争を境にさらに硬直化する中、日本国内においても、日米同盟を軸とする経済優先主義を標榜する「吉田路線」が定着しつつあったことを受けて、日本人の対韓国認識も、経済や冷戦の論理に包摂される傾向が強まった。こうした潮流は、日本が、戦勝国すなわち米国が一方的に再定義した「敗戦国」という歴史認識と、朝鮮半島の分離独立により宗主国の地位を喪失したという現実を受け入れつつ、こうした自己規定に合わせて、韓国認識を再設定する過程でもあった。

まず、敗戦国・日本が直面したのは、戦前における朝鮮経済に対する認識、つまり「植民地朝鮮の経済は帝国日本の強固な支配なしには発展が不可能である」という「経済的内鮮一体」の論理の放棄を余儀なくされた現実であった。米占領当局は少なくとも占領初期まで、日本の再軍備を阻止する目的の下に、日本経済の弱体化のために日本から韓国経済を分離させる政策を強行していた。従って、米占領期における日韓間の経済関係とは、日本と南朝鮮（韓国）の両地域を同時占領した米占領当局間の貿易すなわち米軍内部の占領行政が主流であり⁴²、日韓間の直接的な経済交流は極端に制限された。要するに、日韓経済関係は完全に米占領当局の統制下に置かれていた。

しかし、米国を媒介としていた日韓関係は、朝鮮戦争をきっかけに、量的かつ質的に大いに変化し、同時に日本人の韓国観も動揺する。何よりも日本経済における「朝鮮特需」の比重があまりにも大きくなったからである。朝鮮戦争勃発直後の1950年8月に横浜に在日兵站司令部（Japan Logistical Command）が置かれ、主に直接調達方式により大量の物資が買い付けられた。これを受けて、当時の日本政府は、経済安定本部が中心になり、戦時期の企画院や軍需省が主導した物資動員計画を彷彿とさせるほど、「朝鮮動乱

⁴² このような「軍政貿易」において最も大きな比重を占めていた物資は、石炭すなわち有煙炭であった。宋炳巻『東アジア地域主義と韓日米関係』（東京：クレイン、2015年）、198-239頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

に伴う特需」を最大化させるために挙国的かつ組織的に対応した⁴³。一方の不幸が一方の幸運——それは「神風」とも「天佑」とも称された⁴⁴——という現象が生まれたが、「朝鮮特需」による経済効果は、金額として1950年から1952年までの3年間に10億ドル、1955年までの間接特需として36億ドルとも言われる。ライシャワーの表現を借りれば、朝鮮戦争は日本の経済状態の改善に大きく寄与し、それとともに日本人の自信も高まった⁴⁵。日本にとって韓国は、脱植民地主義を求め続ける極めて「厄介な」相手で、それも米国を通じてのみ対応できる存在であったものの、戦後復興を成し遂げるうえで欠かせない交易の対象として浮上しつつあったのである⁴⁶。

朝鮮戦争が休戦にもかかわらず米国は、少なくとも1950年代中盤まで、韓国行き援助物資の殆どを日本で調達することで、日本の経済成長に大いに寄与した。米国による対韓援助物資の対日購買の問題は、韓国側の激しい不満と抵抗により⁴⁷、米韓関係上ではしばしば紛争の種となったが⁴⁸、日本経済は利益を享受し続けたのである。ただし、日本政府や財界はもちろん、マ

⁴³ この点については、筆者が情報公開請求を行うことで2020年12月に秘密公開された、大蔵省「朝鮮動乱後の情報連絡会議（昭和25年08月～昭和25年11月）」（文書課文書第40号、国立公文書館つくば分館所在）が詳しい。

⁴⁴ 朝鮮特需によって引き起こされた好景気は「特需景気」、「朝鮮戦争ブーム」、「ガチャマン景気」、「糸ヘン景気」、「金ヘン景気」、「投資・消費景気」などと呼ばれた。吉川洋『高度成長：日本を変えた六〇〇〇日』（東京：中央公論新社、2012年）、130-134、158頁。

⁴⁵ ライシャワー、前掲、『ライシャワーの日本史』、292頁。

⁴⁶ 朝鮮戦争によって経済が潤ったせいか、日本の経済界は、この戦争の継続を大いに願っていたとも言われる。孫崎亨『朝鮮戦争の正体』（東京：祥伝社、2020年）、229頁。

⁴⁷ 韓国の李承晩政権は当時、米軍が大量の日本製品を持ち込むことで韓国経済の日本経済への従属傾向が強まりつつあるとの危機意識に加え、朝鮮戦争によって廢墟と化した韓国の犠牲の上に日本が自らの経済復興を築き上げているという警戒感を強めていた。李鍾元「韓日会談とアメリカ『不介入政策』の成立を中心に」『国際政治』第105号（1994年1月）、173頁。

⁴⁸ 例えば、1954年7月29日に開かれた李承晩とアイゼンハワー（Dwight D. Eisenhower）との米韓首脳会談では、この問題を含む日韓関係をめぐって相互に退席で応酬するに至った。しかし、その3カ月後によく纏められた同会談の「合意議事録」では、援助物資の対日購買の不排除など、米国側の要求がそのまま明記された。李東俊「日韓請求権交渉と『米国解釈』：会談『空白期』を中心にして」李鍾元・木宮正史・浅野豊美編『歴史としての日韓国交正常Ⅰ：東アジア冷戦編』（東京：法政大学出版局、2011年）、61-62頁。

スコミに至るまで、対韓援助物資の日本購買を巡る米国側の些細な方針転換にも極めて敏感に反応していた。要するに、戦後日本の対韓国認識は、日韓関係に圧倒的な影響力を行使した米国のアジア戦略という「外力」を通じて再編されつつあったと言える。

開発言説と新しい日韓関係像の浮上

しかし、このように戦後10年以上にわたって米国のアジア戦略に抑制されてきた日本の対韓政策は、1950年代後半から新たな変貌を遂げようとしていた。朝鮮特需を踏み台にして迎えた「神武景気」（1954年12月～1957年6月）を通じて日本経済が戦前水準の一人当たり生産を回復する一方⁴⁹、1950年代後半から米国の対韓援助政策も、従来の贈与や軍事援助から開発援助や貿易を強調する方向に大きく転換しつつあった⁵⁰。これは、従来は米国の対韓援助などアジア戦略に便乗することに留まっていた日本に対して、米国の対韓援助負担を分担するなど、韓国の「開発」のためにより直接的な役割を担うことを求めたのに等しかった。

他方で、戦後復旧を見事に成し遂げた日本経済も、新たな経済成長戦略を講じることを迫られていた。米国版の近代化論や開発言説が急浮上しつつあったこの時期に、日本で主として日本経済の地域的拡張を想定した「アジア地域主義」構想が乱発されたこと⁵¹も決して偶然ではない。冷戦の変容と相まってようやく「敗戦国」の呪縛から逃れるようになった日本は、米国版の近代化論や開発主義の文脈から改めて「自主外交」を模索し始めたのである。そして、日本人の韓国認識も、日本自身のナショナル・アイデンティ

⁴⁹ ライシャワー、前掲、『ザ・ジャパニーズ・トゥデイ』、145頁。

⁵⁰ このような米国の対外援助政策の転換は、アイゼンハワー（Dwight D. Eisenhower）政権の2期目から構想され一部実行されたが、ケネディ（John F. Kennedy）政権になってから、「対外援助特別教書」（1961年3月）や「対外援助法」（1961年9月）、「新太平洋共同体」構想（1961年6月）などにより全面的に可視化する。例えば、保城広至『アジア地域主義外交の行方：1952-1966』（東京：木鐸者、2008年）、121-133・181-188頁を参照。

⁵¹ この点については、保城広至、前掲、『アジア地域主義外交の行方：1952-1966』が詳しい。

ティの変容と相まって、再構成されていく。

1957年12月、岸信介政権が米国の関与の下に「久保田発言」を撤回し、日本の対韓請求権（韓国では、「逆請求権」と呼ばれた）を放棄することで、日韓国交正常化交渉を再開させた背景にも⁵²、こうした開発言説が作動していた。前述したように、「久保田発言」は戦前から日本が堅持し続けた韓国認識、すなわち文明史観や植民地主義史観に基づいた韓国観を象徴するものであり、他方で韓国にとって「久保田妄言」は、日本の植民地支配を正当化する発想として到底受け入れられないものであった。従って、ここで日本が「久保田発言」を正式に撤回したのは、少なくとも表面的には従来の文明史観からの決別を意味した。そして、その空白を埋め尽くし、日韓関係の新たなフレームとして登場したのが、開発主義の論理であった。

実際に、この時期から日本外務省は、それまで日韓会談で最大の阻害要因となっていた請求権問題を「経済協力」を通じて解決する方策をしきりに模索する⁵³。やや図式的に言えば、この試みは、植民地支配に由来する様々な問題を「棚上げ」するか、封じ込める一方、新たに開発主義の文脈から日韓関係を塗り替える企てに等しかった。第4章で詳述するが、この際に駐日大使のライシャワーは「善意の調停者」として日本側のこうした努力を惜しみなく後押しする。

開発の対象としての韓国像

そして、「旧植民地」韓国に対する日本側の認識も、「野蛮な」地域から、開発や投資の対象に変容しつつあった。これは、敗戦直後こそ戦勝国すなわち米国が一方的に規定した「敗戦国としての歴史認識」やナショナル・アイデンティティを受け入れざるを得なかった日本が、やがて経済復興を果た

⁵² 日韓会談再開の経緯については、李東俊、前掲、「日韓請求権交渉と『米国解釈』：会談『空白期』を中心にして」、69-74頁を参照。

⁵³ 金恩貞『日韓国交正常化交渉の政治史』（東京：千倉書房、2018年）、171-223頁。

し、国際社会に復帰することで、旧植民地すなわち韓国との力関係を再認識する過程でもあった⁵⁴。

この点について、吉田茂元総理は1958年、『経済援助とか、賠償とかいうのは、こちら（日本、筆者）からいえば投資である。投資によって開発されれば日本の市場となる。そうなれば投資額は回収されるはずだ』⁵⁵と主張した。韓国を投資や開発の対象と見なす言説は、1950年代後半からまるで堰を切ったように噴出するが、例えば、日韓貿易協会専務理事を務めた湯川康平は、以下のように述べた。

韓国で保税加工は一種の治外法権である。日本が保税貿易を申請すれば、その工場は日本人の所有となる。つまり韓国内に日本の租借地ができることになる。韓国経済の指揮権と資源の中心を日本が掌握しなければならない。⁵⁶

このような日本人の韓国観は、日本社会が開発言説や米国版・近代化論に包摂されていく中、日本が「先進国」という新たな自己アイデンティティを確立していくことで、さらに顕在化する。言い換えれば、開発言説が従来の文明言説に取って代わる中で、日本人の韓国観も開発主義の文脈から再設定されつつあったと言える。もちろん、この開発言説から導かれる日韓関係像も決して平等ではなく、位階的であった。日本は「既に開発された」先進国であり、こうした日本にとって韓国は「開発されるべき」「後進国」と位置付けられたからである。そして、このように設定された日本人の韓国観は、

⁵⁴ 木村幹『歴史認識はどう語られてきたか』（東京：千倉書房、2020年）、7-8頁。

⁵⁵ 『朝日新聞』1958年8月11日。

⁵⁶ 湯川康平「新国策」1962年2月29日（日韓関係を記録する会、前掲、『資料・日韓関係Ⅰ』、37頁から再引用）。

米国の冷戦戦略（特に地域統合戦略）とも相まって、韓国側にその受け入れを迫っていった。

第3章 ライシャワー式の近代化論と韓国の言説空間

1. ライシャワーと韓国、韓国像

日本史を専門にしたこともあって、ライシャワーの関心は一貫して、米国の冷戦戦略に協力すべき日本に集中していた。ライシャワーは、日本の近代化や産業化が、アジアの安定のために極めて重要であり、日本の例を第三世界のモデルにすべきであると一貫して主張した。ライシャワーが駐日大使在任中の1964年、日本が東京オリンピックを派手に開催したばかりか、「先進国クラブ」とも呼ばれる経済協力開発機構（OECD）に加盟することで、この主張は現実化するかに見えた。他方でライシャワーは、このような日本の「成功例」が朝鮮戦争やベトナム戦争など、周辺地域の紛争や犠牲により支えられた点については、ほとんど言及しなかった。

むしろライシャワーの関心は、アジアの近代化をリードすべき日本の安全保障に注がれていた。1968年1月のテト攻勢（Tet Offensive）以来、米軍のベトナムからの段階的撤収が始まると、ライシャワーは、それが日本の安全に影響すると大いに危惧した。さらに、1969年7月にアジアからの米軍撤退を骨子とする「ニクソン・ドクトリン」が公表されると、ライシャワーは、第2の朝鮮戦争の可能性を警告しつつ、その場合に日本が最大の被害を受けるため、韓国に対する軍事支援を強化するよう求めた⁵⁷。ライシャワーの関心の中心にはいつも「生まれ故郷」日本の安全と近代化があり、韓国は

⁵⁷ 「라이샤워 교수 밝혀 “한국전 재발되면 일본에 가장 큰 피해”」〔「ライシャワー教授、“朝鮮戦争が再発すれば、日本が最大の被害を受け”」〕『조선일보』〔「朝鮮日報」〕、1969年7月11日。

あくまでも日本にとって重要であったからこそ、ようやく注目の的となる存在であった。

日本の植民地主義は「大きな功があった！」

しかしながら他方で、これまでほとんど注目されることはなかったが、日本史専門家ライシャワーは、若い時期から韓国や朝鮮半島との間に、表現が難しいほど不思議な縁を積み重ねつつ、関心を寄せてきた。まず、ハーバード大学院生であったライシャワーは、1935年から3年間に渡って日本や中国に滞在して現地調査を行ったが、日本在留中の1937年に日中戦争が勃発し、中国渡航が不可能になった。そこでライシャワーは、同年秋に2カ月に渡り「大日本帝国の一部だった」朝鮮半島へ赴き、「中国への渡航」許可を待つことにした⁵⁸。短い朝鮮滞在の時、ライシャワーは、以下の通り、韓国を新たに「発見」と述べた。

日本の植民地主義は公然と暴力を振るわなかったし、経済開発その他には明らかに大きな功があった。小さな帝国だったから、広大な植民地を持つヨーロッパ列強に比べると朝鮮半島への日本の投資は、比率の上でも大きかった。だが、精神的な面では、日本の支配は残忍だった。朝鮮人に国家としてのアイデンティティを捨てさせ、日本人になることを強要したからである。日本語だけが公用語とされ、朝鮮人には日本名への改姓が強要された。教育のない庶民や年寄りには日本語を話せなかったから、これは明らかに無法、非人間的な措置だった。⁵⁹

⁵⁸ Edwin O. Reischauer, *My life Between Japan and America* (New York: Harper & Row Publishers, 1986), pp. 67-69 [徳岡孝夫訳『ライシャワー自伝』(東京:文藝春秋、1987年)、112-114頁]

⁵⁹ ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、113頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

以上の引用は、ライシャワーが晩年に書いた回顧録からの一部分であるが、明らかにライシャワーは、日本の植民地支配下での朝鮮半島の資本主義的な発展を強調することで、結局は、植民地支配を正当化してしまう「植民地近代化論」を支持していた。日韓の間で今も論争の種となっている植民地近代化論は、近代化、特に経済開発という尺度によって世界を位階的に区分し、植民地主義の弊害や本質を意図的に無視するという点において、1950年代後半以来の米国版の近代化論とも根本的に軌を一にする。ライシャワーは何よりも経済開発や近代化の側面から日本の朝鮮半島に対する植民地支配を是認しており、戦後には米国の冷戦戦略の一環として「先進国」日本による「後進国」韓国の開発を可能ならしめるために、日韓国交正常化を積極的に後押ししたのである。

なお、日本の植民地主義は「経済開発その他には明らかに大きな功があった」、「朝鮮半島への日本の投資は、比率の上でも大きかった」というライシャワーの「発見」とは、到底「発見」とは言えず、第2章第4節で詳しく述べたように、これは、戦前から戦後にかけて日本が一貫して堅持し続けた歴史観そのものであった。従って、ライシャワーの歴史観は、植民地主義（あるいは帝国主義）への省察や反省への意志を全く欠いていた点において、「日米トランス・パシフィックの共犯性」⁶⁰を如実に表していたとも言える。

他方で、ライシャワーは、朝鮮人の高い文化とプライドを知ったと述べつつ、日本植民地主義の「精神的」抑圧が「残忍」であって、「明らかに無法、非人間的」であったと猛烈な非難をも行っていた⁶¹。しかし、これは、あく

⁶⁰ 坂井直樹『日本／映像／米国：共感の共同体と帝國的国民主義』（東京：青土社、2007年）、223-229頁。

⁶¹ さて、ライシャワーは、日本が皇民化政策の一環として植民地朝鮮人に対して強要した神社参拝については別途の意見を述べなかったが、父のオーガスト・ライシャワー（August K. Reischauer, 1879～1971）はこれを日本における基本的な国民儀礼であるとして受け入れた。神社参拝に関する日本及び朝鮮における米国宣教師間の論争については、안종철 [安ジョンチョル] 『미국선교사와 한미관계, 1931-1948: 교육철수, 전시협력 그리고 미군정』 [『米国宣教師と韓米関係, 1931-1948: 教育撤回、戦時協力、そして米軍政』]（ソウル：韓国基督教歴史研究所、2010年）、46-47、108頁を参照。

までも日本の「物理的」植民地支配を肯定したうえでの一種のリップサービスであり、ライシャワー自らの表現をそのまま借りれば、韓国への「深い同情」⁶²の現れに他ならなかった。しかも、後述する通り、ライシャワーは西欧中心の文明史観に則って、韓国の伝統社会に対しても、日本とは比較できないほど、後進的であったと見ていた。

ハンゲルのローマ字表記法の開発

ライシャワーの韓国への関心は本人の博士論文とも深く関わっていた。ライシャワーは、平安時代の838年に最後の遣唐使として唐に留学する円仁が残した『入唐求法巡礼行記』⁶³を研究テーマとしたが⁶⁴、そこにしばしば登場する韓国人(Koreans)を見て当惑せざるを得なかった。在唐中の円仁は在唐新羅人社会の大きな助力を受けており、特にそのころ東シナ海の貿易権を握っていた新羅商人・張宝高が設立した赤山法華院の新羅僧たちの支援や紹介により9年6カ月にも及ぶ「求法の旅」を乗り切り、無事に日本に帰国する。ライシャワーの関心は、円仁と深い縁を結んだ多くの韓国人よりも、韓国人の名前をどのように英語に翻訳するかに注がれた。そして、現代日本語や中国語の発音に拠らず、ハンゲルの発音のままにローマ字で表現する方法を講じていくのである⁶⁵。

⁶² ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、113頁。

⁶³ 『入唐求法巡礼行記』は、日本最古の旅日記で、世界三大旅行記の一つとも言われるが、時の唐皇帝・武宗による仏教弾圧である会昌の廃仏の様子を生々しく伝えるものとして歴史資料としても高く評価されている。特にライシャワーの研究により日本でも著名になり、欧米でも知られるようになった。ライシャワーにより英語訳された。*Ennin's Diary: The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law* (New York: Ronald Press Company, 1955)。この本の第8章(the Korean' in China)と第9章(Homeward Bound)に、山東地域における韓国人の動向が詳しく叙述されている。

⁶⁴ Edwin O. Reischauer, *Ennin's Travels in T'ang China* (New York: Ronald Press Company, 1955); 田村完誓訳『世界史上の円仁：唐代中国への旅』(東京：実業之日本社、1963年); 田村完誓訳『円仁唐代中国への旅：「入唐求法巡礼行記」の研究』(東京：原書房 1984年/東京：講談社学術文庫、1999年); 조성울 [チョソンウル] 訳『중국 중세사회의 여행: 라이샤워가 풀어쓴 엔닌의 일기』[『中国の中世社会への旅行：ライシャワーが解きほぐした解きほぐした円仁の日記』](ソウル：한울 [ハンウル]、1991年)。

⁶⁵ ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、113頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

ライシャワーは前述の朝鮮半島在留中に、在朝鮮半島宣教師の子として平壤で生まれ、当時カリフォルニア大学・バークレー校の歴史学部門の大学院生として韓国で資料調査を行っていたマッキューン（George M. McCune, 1908-1948）と出会った。意気投合した二人は、今日の西欧社会において中国語ローマ字表記のウェード及びジャイルズ式（Wade and Giles for Chinese）や、日本語ローマ字表記のヘボン式（Hepburn for Japanese）に匹敵するマッキューン-ライシャワー・システム（McCune-Reischauer System）を考案した⁶⁶。

ライシャワーによれば、彼らは当時「朝鮮半島が独立し、国家としての標準ローマ字表記法を必要とするなど、夢にも思わなかった」から、ごく少数の欧米の研究者向けの方式を想定していた。しかし、後にこの表記法は、特にマッキューンの働きかけにより、米国地名委員会や米陸軍の陸地測量部に採用され、朝鮮戦争を通じて韓国の地名や人名を表記する最も有力な方式として定着していく⁶⁷。おそらく、この表記法は、ライシャワーが韓国関連で残した最も鮮やかな遺産として記録されるだろう。

軍服を着て、戦後韓国問題の立案

ライシャワーは第2次世界大戦を前後して、軍人として朝鮮半島問題にも関与していた。ライシャワーは、ハーバード大学の教員の資格で、1941年12月8日の日米開戦以前から米國務省の極東課に非公式的に所属し、様々な「政策志向の知識」を量産するが、戦時中には、正式に軍服を着て、陸軍参謀部のGII（情報部）所属の情報将校として日本軍暗号分析に携わる仕事をこなした。なお、第2章第1節でも取り上げたように、この時期にライ

⁶⁶ George M. McCune and Edwin O. Reischauer, "The Romanization of the Korean Language Based upon Its Phonetic Structure," *Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland(Korea Branch, Seoul): Transactions of the Korea branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 29(1939), pp. 1-55.

⁶⁷ ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、116頁。

シャワーは国務省に派遣され、後に「象徴天皇制」とも呼ばれる天皇制の存続を提言する文書を作成するなど、政策立案者としての顔も持つことになった⁶⁸。そして、ライシャワーは、日本敗戦後もすぐには大学に戻らず、1945年秋からは国務省極東局中国部長のヴィンセント（John Carter Vincent）の特別補佐官（中佐）として戦後日本及び朝鮮半島の問題に深く関わる政策立案を本格的に展開する⁶⁹。

ライシャワーが戦後アジア問題に深く関わる経路となったのは、1944年12月に設置され、戦後政策の調整に当たった国務・陸軍・海軍調整委員会（SWNCC: State-War-Navy Coordinating Committee）の傘下組織の極東小委員会である。小委員会では、日米開戦間もない1942年から、国務省・戦後外交諮問委員会の極東部門小委員会で戦後日本の将来像の立案に携わっていたブレイクスリー（George H. Blakeslee）やボートン（Hugh Borton）⁷⁰といった日本専門家たちが引き続き活躍していたが、そこにライシャワーも加わったのである。

この組織が生産した最も有名な政策文書は、戦後日本の姿を方向づけたとも言える「降伏後における米国の初期の対日方針」（Initial Post-Defeat

⁶⁸ ライシャワーは天皇制の将来に関する政策立案が「最もやり甲斐あった仕事」であったと述べた。ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、167頁；坂井直樹、前掲、『日本／映像／米国：共感の共同体と帝國的国民主義』、228頁。

⁶⁹ ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、161-172頁。

⁷⁰ ライシャワーより7歳年上のボートン（1903-1995）は、1920年代後半にクエーカー教宣教師として日本に滞在して以来日本史研究を行っただけに、米国における日本学研究の草分けと言える。1942年から1948年までは、国務省に在籍して（日本部長などを歴任）日本との講和条約の準備に深く関与した。さらに、国務省から退職してからは、コロンビア大学の日本学研究所長として、ライシャワーのハーバード大学と競争しながら、米国における東アジア研究をリードした。コロンビア大学の中国および日本学を中心にしたアジア学については、Wm. Theodore de Bary and Donald Keene, "East Asian Studies at Columbia: The Early Years," *Columbia Magazine* (2002) を参照。なお、ボートンの詳しい履歴などについては、ヒュー・ボートン（五味俊樹訳）『戦後日本の設計者：ボートン回想録』（東京：朝日新聞社、1998年）を参照。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

Policy relating to Japan)⁷¹であろう。ライシャワーらが日本敗戦と同時にまとめたこの政策文書は、1945年8月29日にトルーマン（Harry S. Truman）大統領の指令としてマッカーサー（Douglas MacArthur）連合国軍最高司令官に送られた。その「初期方針」は、日本の降伏が予想外に早まったため、何回も修正・補強されたものの、平和的で責任ある政府の樹立と自由な国民の意思による政治形態の確立、すなわち日本におけるデモクラシーの自然な発展を「奨励」という基調は維持された。

ライシャワーは韓国問題にも深く関わったが、回顧録では、1945年12月のモスクワ3国（米英ソ）外相会議の宣言に基づき、南北朝鮮の統一独立に先立って行われる4カ国による5年間の朝鮮信託統治の具体案作成にとりかかったと特筆している。この具体案がどのようなものであったかは不明であるが、ライシャワーは、「たしか6段階の交渉案をまとめたが、実際の交渉は『朝鮮側民主的分子との協議』という第1段階で^{つか}悶えたまま前進せず」、結局「実行されずじまいだった」⁷²と名残惜しそうに述べた。その上に、その失敗の最大の原因が「共産地区に住む連中だけを協議の対象に」しようとしたソ連側の意図と、それを追隨した「共産化した（朝鮮半島の）北部に住んだ連中」にあったと非難した。

周知の通り、モスクワ3国外相会議の信託統治案は日本の植民地支配からようやく独立を勝ち取った韓民族に強い衝撃を与え、結局、これを巡って国論が分裂し、朝鮮半島の南北分断が決定づけられた。ライシャワーは、分断の責任をソ連側に転嫁したが、仮にそれを認めるとしても、既に38度線以南の韓国を占領していた米国側が、朝鮮半島における統一国家の成立を望ん

⁷¹ この文献およびかかる解説は、国立国会図書館がホームページに開設している電子展示会『日本国憲法の誕生』の「米国の『初期対日方針』」を参照。https://www.ndl.go.jp/constitution/shiryu/01/022shoshi.html.

⁷² ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、170-171頁。

だであろうか。ライシャワーが第1段階の交渉相手として想定したという「朝鮮側民主的分子」という対象の立て方自体が、朝鮮半島の分断を前提にした発想ではなかったか。

米国初の「韓国学」研究の発足

いずれにせよ、以上のようなライシャワーの韓国への「政策的な」経験は、学問的な領域へと拡散していく。軍人の身分から1946年にハーバード大学に戻ったライシャワーは東アジア学研究を確立するために、韓国関連講座の設置を主張し続けたが、回顧録では、これが同大学における「最も重要な革新 (my most important innovation)」⁷³であったと述べている。韓国学どころか、韓国そのものが「忘れられた戦争」(Forgotten War)であった朝鮮戦争とも相まって、関心の種にさえもならなかった当時の米国社会の現実を想起すれば、ライシャワーの韓国学への意欲はまさしく「革新」に等しい発想であったと言える。

そして1958年、ライシャワーは韓国学研究の基盤を確保した。米国アジア学会 (AAS: Association for Asian Studies) の初代会長で、ハーバード大学東アジア専攻教授委員会の議長でもあったライシャワーは同年、自ら理事として関わっていたロックフェラー財団 (Rockefeller Foundation) と、所長を務めるハーバードいんちん燕京研究所からそれぞれ20万ドルずつの基金を確保し、韓国学講座を新設した。そして、ライシャワーの事実上の教え子として、韓国史研究に注力していたワグナー (Edward W. Wagner, 1924-2001) が最初の職を得ることになる。

さて、ワグナーは1951年に在日朝鮮人に関する修士論文を改めて出版したが、推薦文を記したのはライシャワーだった。推薦文の冒頭に示されたライシャワーの視点が目を引く。

⁷³ Reischauer, *op.cit.*, *My life Between Japan and America*, p.171.

戦後日本における韓国人たちは米占領軍に多くの厄介な (troublesome) 問題を量産していた。同化されない少数派として彼らが日本に存在することで生じるこの問題は、容易には解決されそうもなく、日本や韓国の両政府のレベルではなくとも、日韓両国の一部の人々には苦さ (bitterness) をもたらすだろう。⁷⁴

ライシャワーが上記の推薦文を書いたのは、朝鮮戦争中だった。当時多くの在日朝鮮人は米国の戦争介入や日本の後方支援に反対する姿勢を見せていた。ライシャワーは共産主義と闘っている情勢を踏まえ、それに協力しない在日朝鮮人を日本社会に同化されない「厄介な」存在と述べたのであろう。ほとんどの在日朝鮮人が日本の戦時労務動員（徴用）によって日本に移り住むようになった歴史的経緯や、だからこそ彼らが戦後、民族主義に傾斜せざるを得なかった事情を、ライシャワーはほとんど理解していなかったように見える。では、「東アジア学」を追求したライシャワーは、どのように韓国を認識し、東アジアの中に位置付けようとしたのであろうか。

ライシャワーにおける「位階的な」東アジアと日本

ライシャワーの韓国及び東アジア認識は、中国近代史専門のフェアバンク (John K. Fairbank) とともに1960年に著した *East Asia: The Great Tradition*⁷⁵ (『東アジア：偉大な伝統』、以下『東アジア I』と略す) に最も深くかつ詳細に示されている。研究者ライシャワーの代表作とも言える同書は総じて、地域としての東アジアの歴史的展開を構成することで、「東アジア学」

⁷⁴ Edward W. Wagner, *The Korean Minority in Japan, 1904 ~ 1950* (New York: Institute of Pacific Relations, 1951), p. i .

⁷⁵ Edwin O. Reischauer & John K. Fairbank, *East Asia: The Great Tradition* [A History of East Asian Civilization Vol. I] (Boston: Houghton Mifflin Company, 1960).

という地域研究の土台を築いた著作と評価されている⁷⁶。実際、同書は米国の「東アジア学」関連学界にあっては、古典的バイブルとしての地位を長く享受してきた。

ここで注目すべきは、同書におけるナラティブの表層構造である。『東アジア I』は、「東アジア文明はその大部分の特質が中国で生まれ発展した」⁷⁷との前提に立った上で、日本や韓国の文明を、中国文明の影響を受けた「変形」(variants)として捉えている。例えば、韓国を取り上げた第10章の副題は、「中国文化類型の一変形」(A Variant of the Chinese Cultural Pattern)となっている。章立てを見ても、全14章中、中国8、日本3、韓国1章の構成となっている。この構成を見ても、同書が描こうとした「東アジア」とは、中国文明と、その変形としての日本や韓国文明で形成された地域であった。西欧から見た「東アジア」という地域が、まさにライシャワーによって再構成されたのである。

しかしながら、同書を理解するうえでより重要なポイントは、ナラティブの表層構造とは大きく異なるナラティブの深層構造すなわちコンテクストにあると思われる。同書は東アジア地域文明の始原たる中国を中心にした地域の展開を追ってはいるが、焦点はむしろ、中国文明の変異型に過ぎなかった日本が「なぜ、いかに、唯一、近代化に成功したか」という質問への回答に向けられていたからである。『東アジア I』は、3章に渡って日本の歴史を取り上げているが、古代日本を「中国文明の吸収」期、中世日本と近世日本を「中国型からの離脱」期、「集権的封建国家」期と、それぞれ副題をつけて分類している。中国中心の東アジアから日本のみが離脱し、別途の文化の

⁷⁶ この本は、ライシャワーとフェアバンクの共著となっているが、中国の元・明・清国時代を説明した3カ章(第7～9章)を除いて、中国の古代と前近代、韓国史、日本史など、残り10カ章を全て日本史専門のライシャワーが執筆した。Reischaure & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, p. vii.

⁷⁷ Reischaure & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, p.19.

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

形成に成功したことに焦点が当てられたのである。

このナラティブの枠組みによれば、日本は、最初は中国文明の変異型から出発したものの、独自の変化（variation）を遂げて「前近代的な」中国や朝鮮の文明から漸進的かつ加速的に分離され、特にヨーロッパ諸国も経験した封建制を確立することで、近代化の条件を整えたことになる。ヴェーバー（Max Weber）が、なぜ中国やインドでは近代化が進展しなかったのかという疑問に答えようとしたのであれば⁷⁸、ライシャワーは日本という例外を立証しようとしたとも言えよう。『東アジア I』の副題である東アジアの「偉大な伝統」は、中国ではなく、日本によって築かれたことになる。

もちろん、ライシャワーにとって、こうした近代化への成否を決める最も重要な指標は、マルクス（Karl Marx）のいう生産力や生産関係よりも、ロック（John Locke）のいう社会契約の属性やかかる近代的な資質（talents）と態度（attitudes）をも含んだ封建制の経験如何であった。そしてライシャワーは『東アジア I』を通じて、中国や韓国とは異なり、日本のみが西欧で言われる近代を迎える上不可欠な封建制というチケットを持っていたことの政治的・経済的・倫理的意味を探り続けていた。

このような執筆の意図をさらに明確にするためか、ライシャワーは5年後の1965年に、『東アジア II』に相当する *East Asia: The Modern Transformation*⁷⁹

⁷⁸ 富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』（東京：講談社、1998年）、19頁。

⁷⁹ John K. Fairbank, Edwin O. Reischauer, Albert M. Craig, *East Asia: The Modern Transformation* [A History of East Asian Civilization Vol. II] (Boston: Houghton Mifflin Company, 1965). ライシャワーは、フェアバンクなどとともに「東アジア文明史」(A History of East Asian Civilization) シリーズとして上・下2巻を刊行した。ただし、韓国編として一章を割り当てた上巻 (Vol. I) とは異なって、主としてフェアバンクが執筆した下巻 (Vol. II) には、近代化の衝撃を受けた中国と日本の対応ぶりが叙述されており、韓国については植民政策と民族主義に関する章で簡略に記すにとどまった。この「東アジア文明史」シリーズは韓国で、全海宗・高柄翊訳『동양문화사 上』[『東洋文化史 上』] (ソウル：乙酉文化社、1964年)；全海宗・閔斗基訳『동양문화사 下』[『東洋文化史 下』] (ソウル：乙酉文化社、1969年)として刊行された。さて、このシリーズは、1978年に *East Asia: Tradition & Transformation* とのタイトルで合本体として刊行されて以来、1989年には韓国の民主化と中国の市場開放をも反映し、さらにベトナム編をも含めた改正版が出版された。John K. Fairbank, Edwin O. Reischauer, Albert M. Craig, *East Asia: Tradition & Transformation* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1989).

『東アジア：近代の変容』を刊行した。そして、『東アジアⅠ』と『東アジアⅡ』との境界線は、他ならぬ近代西欧との衝撃的な遭遇であり、著述の流れが「近代化に成功した日本と、失敗した中国・韓国との明確な対比」に帰結したことは当然であった。このようにライシャワーは、近代化という文脈から「日本>中国>韓国」という極めて位階的な「東アジア学」の体系を構成したのである。

中国文明の「哀しい」一変形としての韓国

『東アジアⅠ』のナラティヴ構造が以上のようなものであったとすれば、その中で韓国はどのように位置付けられ、描かれたのであろうか。「中国文化類型の一変形」という副題からも分かるように、同書の韓国編（第10章）で一貫して追求されている射程は、韓国が長い歴史の各段階で中国文明という求心力にいかに従属し、影響を受けていたかに向けられた。そして、韓国はその歴史が始まる時点から中国型の文明に隷属していただけでなく、西欧が近代を迎えつつあった朝鮮時代にはむしろ、「変化しない」中国と比べてもさらに中国的で「躍動性のない」(immobile) 社会となってしまった⁸⁰と結論付けている。しかも、こうした「大胆な」解釈は、いち早く中国から離れて独自のシステム、特に封建制を築いた隣国日本の成功例としばしば、比較する文脈の中で下されていた。

このようなライシャワーの韓国観は、20世紀初頭から本格的に日本社会に深く根を下ろした植民主義史学の観念を想起させる。停滞史観や他律性史観、そして「日鮮同祖論」などに代表される植民主義史学にあって、韓国はそもそも自主的な歴史を持たず、常に外部の勢力（特に中国）によって他律的に動かされてきた社会と規定されていた。ライシャワーが描いた韓国の伝統社会も、中国の文明や歴代王朝へ従属し翻弄され続けた、他律的なものに

⁸⁰ Reischauer & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, pp. 448-449.

他ならなかった。だからこそ、「前近代的な」中国と近すぎ、しかも自力では近代化できない韓国は「より苦い世紀（a very bitter century）」⁸¹、すなわち「近代国家」日本により植民地化される運命を迎えた、とライシャワーは淡々と締めくくった。

日米韓コラボレーションによる「停滞された」韓国像の成立

以上のように、ライシャワーは西欧中心の文明史観に基づいて「アジア学」なるものを構成した。面白いのは、ライシャワーが韓国に限っては自らの勉強不足を繰り返し認めていたことである。例えば、本文中では、韓国に関しては殆ど研究されていない事情などを詳しく紹介しつつ、「そもそも韓国に割り当てられるべき分量より短く書くしかなかったこと」への了解を求めただけでなく、『東アジア I』における韓国関連解釈が「日本や中国のケースより乏しい根拠に基づいている」（presented with less assurance than in the case of Japan and China）⁸²とまで述べた。そればかりか、ライシャワーは『東アジア I』の「序文」にて、韓国編に限って以下の通り、やや意外な謝辞を表している。

我々（ライシャワーとフェアバンク、筆者）は、特に本書の……第10章の韓国に関する叙述を可能ならしめた3人に感謝申し上げます。東アジアの歴史のうち韓国に関する適切な概説書がなかったため、我々は、旗田巍著『朝鮮史』に非常に依存しました（unusually dependent）。なお、ソウル大学の李丙燾教授とハーバード大学のワグナー博士は、我々の原稿に対して極めて精密な修正（very careful revision）を加えてくれました。⁸³

⁸¹ Reischauer & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, p. 449.

⁸² Reischauer & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, pp. 399-400.

⁸³ Reischauer & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, p. vii.

まず、『東アジア I』の韓国編が旗田巍の『朝鮮史』に依存したことをライシャワーが述べている点は注目に値する⁸⁴。旗田の朝鮮史研究とライシャワーの韓国観との相関性を詳しく扱う紙幅はないが⁸⁵、朝鮮戦争中の1951年に刊行された『朝鮮史』は、「戦前の植民主義的歴史学と決別する」と宣言した、当時としては画期的な著作と評価されてきたからである⁸⁶。第2章第4節でも述べた通り、旗田は一貫して日本の朝鮮に対する植民地支配の反省を意識しており、それを最初に全面的に打ち出したのが『朝鮮史』であった⁸⁷。しかも、旗田や梶村秀樹などが加わった日本朝鮮研究所（朝研）はライシャワーの日本近代化論なるものに対して、日本の植民地支配を正当化するイデオロギーであると非難し、対抗的な研究に力を注いだ⁸⁸。こうした立場にあった旗田の著作に、ライシャワーは『東アジア I』の韓国編を著述する際、「非常に」依拠したのである。

しかし、皮肉な結果といえるが、ライシャワーが大いに依拠した『朝鮮史』は、植民地主義史観と一線を画すとの旗田自身の意思表示とは裏腹

⁸⁴ 回顧録では、「旗田巍による簡単な概史に拠って書かなければならなかった」と述べている。ライシャワー、前掲、『ライシャワー自伝』、229頁。

⁸⁵ この点については、장세진 [ジャンセジン] 「라이샤워, 동아시아, 권력 / 지식' 의 테크놀로지: 전후 미국의 지역연구와 한국학의 배치」 [『ライシャワー、東アジア、権力／知識のテクノロジー：戦後米国の地域研究と韓国学の配置』] 『상허학보』 [『尚虚学報』] 36 (2012年10月)、119-126頁にて、取り上げている。

⁸⁶ 例えば、旗田は、『朝鮮史』の「序」において、「何よりも朝鮮の人間が歩んで来た朝鮮人の歴史を研究せねばならない」と訴えている。旗田巍、前掲、『朝鮮史』、5頁。この本は、1969年に英訳出版され、長らく米国における韓国学の基本教材として使われた。Hatada Takashi (Warren W. Smith, Jr. and Benjamin H. Hazard trans.), *A History of Korea* (Santa Barbara, CA: ABC Clío Inc., 1969).

⁸⁷ 旗田巍の具体的な履歴については、고길희 [高キルヒ] 『하타다 다카시: 마산에서 태어난 일본인 사학자』 [『旗田巍：馬山で生まれた日本人史学者』] (ソウル：知識産業社、2005年)を参照。

⁸⁸ 韓昇憲 「冷戦下の日朝間の学術交流のあり方：日本朝鮮研究所の日朝学術交流運動を中心に」、東京外国語大学海外事情研究所 *Quadrante* no.21 (2019)、222頁。

ライシャワーの文化冷戦と日韓関係の変容
：1960年代前半における近代化論の展開を中心にして（その2）

に⁸⁹、戦前の日本の朝鮮研究に依拠する部分が多かった。朝鮮近現代史専門の三ツ井崇などが指摘したように、旗田の『朝鮮史』は間違いなく急進的だったが、あまりにも「典型的」でもあった⁹⁰。例えば、『朝鮮史』は、古代韓国が中国の漢王朝により支配されたこと（「漢四郡」説）や古代日本による韓国支配（「任那日本府」説）、朝鮮王朝の無能ぶりと党派争い（党争）などについて詳述しており、これらは朝鮮他律論など、植民地主義史学を支える中心的な根拠であった。なお、旗田が「朝鮮人の苦悩を自己の苦悩とすることが、朝鮮史研究の起点である」という姿勢の下に著した、支配層に抑圧される朝鮮民衆に関するナラティヴは、むしろ朝鮮社会の「停滞性」を浮き彫りにする結果を生み出してしまった。総じて、旗田の『朝鮮史』は、「従来の成果を汲み取る」⁹¹あまり、戦前からの植民地主義史観を継承するような、逆説的な結果を生み出したと言える⁹²。

そして、このように『朝鮮史』に示された他律的かつ停滞的な姿の韓国史像を、ライシャワーは『東アジア I』で、時にやや誇張しながら、過度なほど充実した後追いついたのであった。このことは、戦前から日本が築いてきた植民地主義史観が、戦後新たにライシャワーを通じて米国における「東アジア学」という地域学の中に位階的に組み込まれたことに等しかった。

⁸⁹ 例えば、旗田は、日本の植民地朝鮮に対する農業政策を搾取行為に等しいと評し、「敗戦前の日本人が白米に満腹できたのは、朝鮮農民の犠牲があったからである」と記した。旗田巍、前掲、『朝鮮史』、213-214頁。

⁹⁰ 미쓰이 다카시 [三ツ井崇] 「전후 일본에서의 조선사학의 개시와 사학사상 (像) : 1950 ~ 60 년대를 중심으로」 [「戦後日本における朝鮮史学の開始と史学史像」] 『한국사연구』 (『韓国史研究』) 153号 (2011年6月)、343-369頁。

⁹¹ 旗田巍、前掲、『朝鮮史』、5頁。

⁹² この問題点に気づいたのだろうか。旗田は後に停滞性論や他律性論など植民地主義史観の呪縛から逃れなかったという自己反省の意味を含めて、自ら『朝鮮史』を絶版にした旗田の自らの朝鮮史研究に対する評価については、旗田巍「朝鮮史研究をかえりみて」『朝鮮史研究会論文集』第15号 (1978年)；「朝鮮史研究の成果と課題：朝鮮史像を中心にして」『朝鮮史研究会論文集』第21号 (1984年)；「日朝関係と歴史学」『日朝関係史を考える』 (東京：青木書店、1989年)を参照。さて、『朝鮮史』は旗田巍 (1908～1994年) 死後の2008年に、岩波全書セクションとして復刊された。

また、『東アジア I』韓国編の監修にあたり、ライシャワーから直接の謝辞を受けたソウル大学の李丙燾は、朝鮮総督府の朝鮮史編纂委員会出身の韓国古代史専門家で、戦後韓国における植民地主義史学の継承者たる人物であった⁹³。もう一人の監修者として挙げられたワグナーは、前述の通り、ハーバード大初の韓国学教員として、朝鮮儒学史を専門とした高橋亨⁹⁴や前述の李丙燾から指導を受けていた⁹⁵。極端に言えば、ライシャワーが『東アジア I』を通じて描き出した韓国像は、戦後日米韓における文明史観や植民地主義史観の後継者たちの合作品であった。そして、後述するが、このように再構成された韓国認識とナラティヴは、ライシャワーの「日本近代化論」なるものとも併せて、1960年代から韓国社会でも有力な言説として受容される。

⁹³ 李丙燾の研究歴や植民地主義史観を批判的に捉え直した書籍としては、김병기 [金ビョンギ] 『이병도·신석호는 해방 후 어떻게 한국사학계를 장악했는가』〔『李丙燾·申奭鎬は解放後、どのように韓国史学界を掌握したのか』〕(ソウル：ハンガラム歴史文化研究所、2020年)がある。

⁹⁴ 京城帝国大学教授などを務めた高橋亨は戦後には天理大学で「朝鮮学会」を発会させた。高橋は朝鮮の儒学について朱子学のみ偏った思想的な従属性を特徴とすると主張した。ワグナーは1956年に2年間にわたって高橋の門下に入り師弟関係を組んだ後、ソウル大学に移り、李丙燾に師事したという。안종철 [安ジョンチョル] 「주일대사 에드윈 라이샤워의 근대화론과 한국사 인식」〔『駐日大使エドウィン・ライシャワーの近代化論と韓国史認識』〕『역사문제연구』〔『歴史問題研究』〕第29号(2013年4月)、310-311頁。

⁹⁵ ライシャワーは『東アジア I』韓国編の「李氏朝鮮の党争」(Factional Disputes of the Yi Dynasty)で特別にこの節がワグナーの著述に依拠する旨を表している。Reischaure & Fairbank, *East Asia: The Great Tradition*, p. 438. ここでのワグナーの著述とは、1959年にハーバード大学に提出されたワグナーの博士論文 *The Literati Purges: Case Studies in the Factionalism of the Early Yi Dynasty* を指すが、朝鮮時代の「党争」(とくに「土禍」)について分析している。

